

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02391

研究課題名（和文）「地域への親しみを育む」保育実践を可能とする評価モデルの作成

研究課題名（英文）Producing the evaluation model for nursery practices that can raise familiarity with the local community

研究代表者

及川 留美（Oikawa, Rumi）

東海大学・児童教育学部・准教授

研究者番号：60788800

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：保育施設における地域「地域」との関りの実態および保育実践に関する自己評価の実態を明らかにするため、全国の認定こども園に対してアンケート調査を実施した。9割以上の園で自己評価を実施しているものの、評価項目として地域に関連するものを取り上げている園は、半数に満たないことが明らかとなった。また、多くの子ども園で地域との関わりを保育活動の一部として意識していないという傾向があった。評価モデルを作成することを目的にこども園3園でフィールドワーク調査を実施した。地域への親しみを育む具体的な実践の構造については明らかになったものの、そこから共通性を見出すことはできず、評価モデルの作成には至らなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育施設において地域資源を活用した実践は多く行われているという現状はあるものの、子どもたちの地域への親しみを育むことが目的とされていることは少ない。本研究課題においてフィールドワークから導いた3園の地域に対する意識および保育の構造は、保育実践に関して多くの示唆を含むものである。保育施設が自園のある地域の地域性を考慮し、3つ中からその園にあった構造を応用し、実践を重ねることによって、子どもたちの地域への親しみを育むことが可能となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The research was conducted at Certified Children's Centers in Japan to reveal how childcare facilities have contact with the local community, and how they do self-assessment about nursing practices. As a result, although more than 90% of children's centers carried out the self-assessment, less than half of them included the evaluation items about the local community. Also, they did not consider having relations with the local community as one part of nurturing activities. Fieldwork research was done in three children's centers to compile evaluation models. The research found the structure of how they raise familiarity with locals, but the structures have nothing in common. Therefore evaluation models cannot be created.

研究分野：保育学

キーワード：認定こども園における地域との関わりの実態 認定こども園における自己評価の実態 地域への親しみを育む保育実践の構造

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

平成 29(2017)年に改正された『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』には、「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が共通の指針として明記された。このことによって幼児期における教育の重要性とその後に続く小学校教育への連続性が示されたと同時に、学校や児童福祉施設といった形態にかかわらず、すべての保育施設が小学校就学前の子どもたちの教育機関であることが位置付けられた。この「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」とは小学校就学時の子どもの具体的な姿である。その中の1つに「社会生活との関わり」があり、「地域の身近な人と触れ合う中で、～地域に親しみを持つようになる」、「園内外の環境に関わる中で、～社会とのつながりを意識するようになる」とある。幼児教育において重要なことは、環境を通じた直接体験によって子どもたちの興味・関心が高められ、より主体的・対話的に学びを深めることにある。つまり園内外の環境を通して、子どもたちが「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」(領域「環境」・内容) 経験をし、地域への親しみや社会とのつながりを感じられるようにすることが保育現場に求められているといえる。

しかしながら文部科学省から示されている幼稚園評価ガイドラインには、保護者・地域住民との連携の欄に「地域の自然や文化財、伝統行事の活用状況」および「教材の開発等に地域などの外部人材の活用状況」といった記載しかない。活用の方法や内容について、および保育の実践として触れる記載はなく、この枠組みだけでは、地域の文化財や人材の活用の有無についての評価にとどまり、自園の取り組みのどこに課題があり、どう改善したらよいかという視点、つまり保育の質の向上へは結びつきづらい。またそれまでの研究において実際の子どもの保育を担う保育者自身に地域文化や地域資源に触れる機会がほとんどないことが明らかとなっていた。

2. 研究の目的

1の研究当初の背景を受け、本研究では、子どもたちの「地域への親しみを育む」という観点から保育内容の評価項目のモデルを作成することを目的とした。この評価項目は、現在文部科学省からガイドラインとして示されているような地域の教育資源の活用の有無といった枠組みだけではなく、保育実践の内容について課題を明らかにできるものである。また多様な背景をもつ保育者が子どもの「地域への親しみを育む」保育実践を可能とするという特徴をもつものである。

3. 研究の方法

(1) 認定こども園に対する全国質問紙調査

保育施設における自己評価およびその評価項目、保育実践における地域社会に親しむ保育実践の実態を明らかにするため全国質問紙調査を実施した。

全国の都道府県を人口数が近くなるように5つのブロック(北海道・東北・北関東ブロック、南関東ブロック、中部ブロック、関西・中国ブロック、四国・九州ブロック)に分け、各ブロックにある認定こども園から無作為に160園を抽出した。計800園に質問紙を郵送し、紙媒体またはWebにて回答を依頼した(2021年9月～2021年11月)。質問項目は自己評価について、地域に関する考え方について、地域資源や地域文化の活用についてであり、地域資源や地域文化の活用については、どのような資源をどのように活用しているかという内容について自由記述を求めた。

(2) こども園3園のフィールドワーク調査

地域への親しみを育むための実践を行っている園の具体的な実践の検討から、評価モデルの作成することを目的とし、認定こども園A園(栃木県)Bこども園(熊本県)Cこども園(沖縄県)を対象として、フィールドワーク調査を実施した(2022年7月～2022年9月)。主に理事長や園長および保育者にインタビュー調査を実施した。インタビューの主な質問内容は、園の位置する地域環境についての聞き取り(園を取り巻く地域の特徴、園を取り巻く地域環境や地域住民の変化) 園と地域との関りについての聞き取り(「地域」をどのようなものとしてとらえているか、子どもと地域との関りをどのようなものとしてとらえているか、地域(自然・施設・文化・人材等)を取り入れた活動としてどのようなものがあるか、日々の実践において地域との関りについて具体的にどのようなことを意識しているか、地域を取り入れた活動によって、子どもたちにどのような育ちが見られたか、あるいは期待できるか、地域を取り入れた活動を行う際、課題となることはなにか、また可能な場合は保育実践の観察を行った。インタビューの内容および実践の様子は許可を得て録音、および撮影を行った。

なお、(1)、(2)の調査は東京未来大学研究倫理委員会の承認を経て実施した。

4. 研究成果

(1) 全国質問紙調査の結果

回答園の内訳

全国800園の認定こども園に質問紙を送付し、237園の回答を得た。回収率は29.6%であった。全回答における設立区分の割合は学校法人26.8%、社会福祉法人53.2%、公立20%であった。ま

た園の規模として在籍園児数を訪ねたところ、100名以下の園が全体の29.2%、101名～150名以下が40.6%、151名～200名以下が12.3%、200名以上が17.3%であった。次に、園の周辺の地域性については、過半数が住宅地帯であり(58.7%)、その次に農業地帯(19.6%)、人口減少エリア(9.8%)、商業地帯(2.6%)、その他(9.3%)であった。

こども園の自己評価の実態

今回の結果から、ほとんどの園が自己評価を実施している(92.4%)が、自己評価項目として地域に関連する具体的な項目を取り入れている園は、半数に満たない(44.2%)ことや「地域」に関する捉え方も幅広いことが分かった。評価項目の地域に関する記述において出現頻度が一番多かったのは「地域との連携・交流など」である<図表1>。その内容においては、園運営や保育を営む方法の意味で「地域との連携・交流」という言葉を使っている場合と子どもが地域に親しむ実体験の活動として「地域との連携・交流」を捉えている場合があり、具体的内容にズレがあることが明らかとなった。子どもの「地域」への親しみを育むことに関する視点から、自己評価項目の捉え方やその意味合いを吟味する必要があることが示唆された。

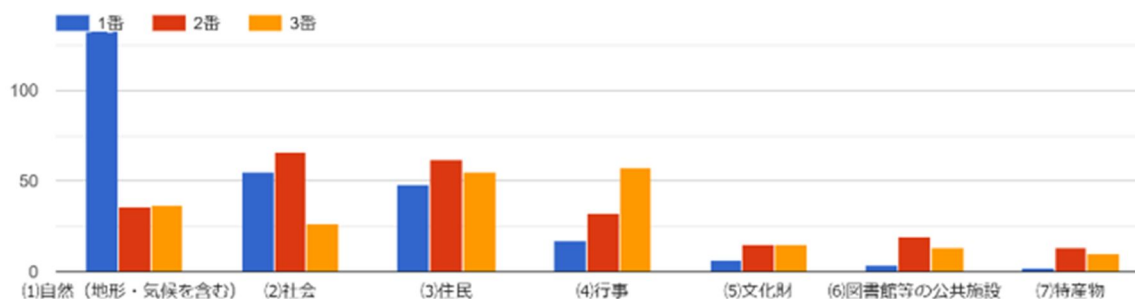
自己評価項目のうち「地域」に関連するもの	回数
地域との連携・交流など	93回
園開放・一時保育・職場体験など	25回
子育て支援・相談など	22回
園の情報の発信など	16回
地域の行事参加など	15回
地域の人材活用など	9回
地域の資源活用など	7回
その他	11回

<図表1>地域に関連する項目 (複数回答)

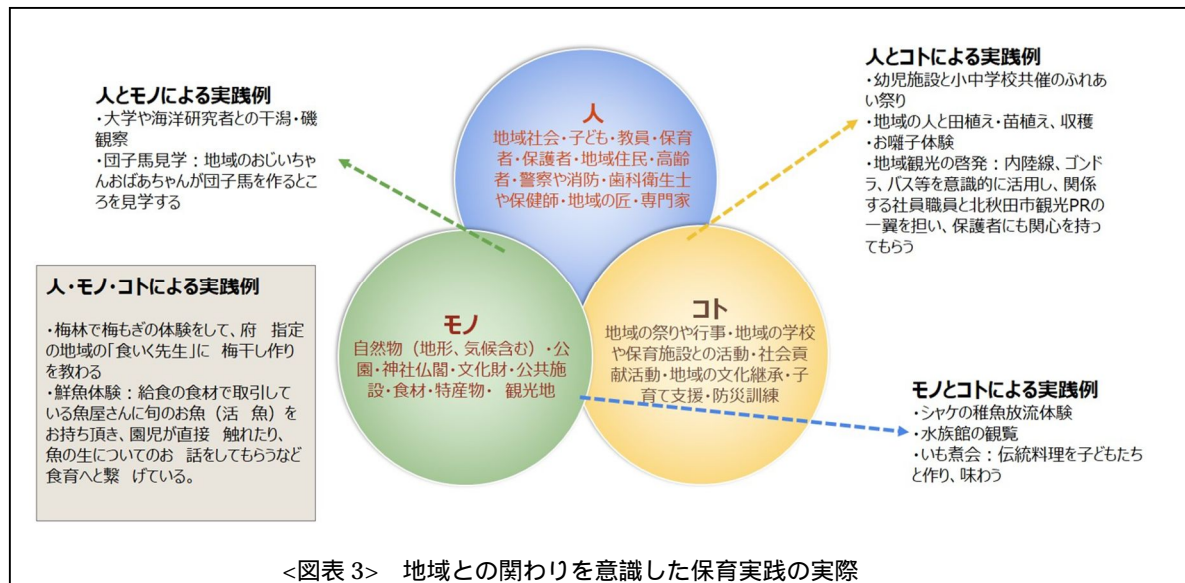
こども園の地域との関わりの実態

保育における「地域」との関わりの実態については、身近に取り入れやすい「自然環境」を挙げている園が多く、優先順位としても最も重要視していることが明らかになった。子どもの生活全体を豊かにするために重要だと思われる要素について優先順位を尋ねたところ、自然を最も重要視する園が多数を占めた(図表2)。各園が最も身近に取り入れやすい「地域」が自然であり、子どもたちが様々な自然に触れることができる環境であるということが確認できた。一方、地域色が強いと考えられる文化財や特産物は低い傾向が見られ、保育における環境として「地域」があまり意識されていないことが明らかとなった。

園の地域の人(地域住民・高齢者・専門家等)やモノ(自然物・公共施設・公園等)コト(行事や祭り等)を活用し、実際に行っている保育実践について自由に回答を求めた。図表3にあるようにそれぞれの要素を複合的に活用しながら保育実践を行っていることが明らかになった。



<図表2> 自園が考える地域の捉えの優先順位



<図表3> 地域との関わりを意識した保育実践の実際

今回の調査から、園の保育に地域を取り入れてない理由も明らかになった。それは「コロナ禍である」という社会現象によるものと「地域における伝統文化がない」や「(地域に関する)知識をもった人を知らない」、「必要性を感じない」など保育する側が地域を意識しようとする視点の欠如によるもの、そして「外国籍児が多い」や「宗教を主軸としている園なので取り入れていない」などの園側の特性によるものがあった。これらの要因によって地域との取り組みが制限され、地域文化の継承がし難い状況になっていることが示唆された。

本研究の結果からも分かるように、自己評価を実施している園さえも子どもが地域に親しむ環境として「地域」を捉えているとは言い難い。そのため、子どもが地域に親しみをもちようになる保育現場での様子を調べるとともに、望ましい保育活動を評価するための尺度を提案することが必要であることが調査結果より明らかとなった。

これらの全国質問紙調査の結果は、日本保育学会第75回大会および日本保育者養成教育学会第6回研究大会で発表を行った。また、保育現場において「地域」をどのように捉えるかという論題にて、論文にまとめた(2022 未来の保育と教育第9号 18)。

(2) こども園3園のフィールドワーク調査の結果

フィールドワーク調査の結果について、調査園の概要、保育実践の特徴の一部例をあげ、地域への親しみを育む保育実践について考察する。

調査園の概要

<図表4> 調査対象園の概要

園名	認定こども園A園 (栃木県)	Bこども園 (熊本県)	Cこども園 (沖縄県)
沿革	1959年に幼稚園として設立。当時の園長(現理事長)が地域でのネットワーク再生を意識し2007年に認定こども園に移行。	1976年保育園設立。認可を受けず、1歳から5歳児の保育を行う。その後2013年NPO法人のこども園に移行する。	2019年に公立の幼稚園から認定こども園に移行。幼稚園の時は1年保育であったが、こども園に移行後3年保育を開始する。
園の規模	0~2歳児各1クラス 3歳児 4クラス 4歳児 3クラス 5歳児 3クラス	0歳児~5歳児 各1クラス	3歳児2クラス 4歳児2クラス 5歳児4クラス

<図表5> 調査対象園の地域特性および地域の捉え方

園名	認定こども園A園 (栃木県)	Bこども園 (熊本県)	Cこども園 (沖縄県)
園周辺の地域特性	市街地や住宅地から離れ、運動公園に隣接している自然豊かな地区に位置している。園の近隣は住人や子育て世帯が減少し、住民による地域コミュニティは衰退している。園内には地下水を利用したピオトープや畑があり、ヤギの飼育を行うなど、広い敷地を有している。隣接して焼き窯、地域子育て支援事業を行うNPOが使用する建物、広場などがある。	大都市の郊外にある住宅地に位置している。徒歩圏内には、南東に5km、長さ2.5km、周囲6kmに渡る大きな湖があり、広域の遊歩道や親水空間が整備されており、貴重な水生生物や野鳥を観察することができる。そこでは幅広い世代の市民がウォーキングやピクニックを楽しんでいる。また、園から湖に向かう途中には、市動植物園の園舎を望むことができる。	新興住宅地であり、県外からの流入してくる人が増加している。かつては地域行事などを通して、地域の人々の交流が盛んであったが、近年は地域行事への参加が減りつつある。園の近隣において、かつて盛んであった青年会の活動などが新型コロナウイルスなどの影響もあり下火になってきている。
地域の捉え方	これからの地域コミュニティは、「子どもと子育てで、1つのライフスタイルや価値を共有するネットワーク」であると捉えている。そのため、園のある市内全体や隣接しに及ぶ広い範囲になる。	園における地域とは、子どもの足で歩いていける距離と捉えている。年齢を問わず意見を求め、ほぼ毎日近隣地域の広範囲に散歩に出かける。	5歳児の多くは卒園後に併設されている小学校そして近くの中学校へと進学することもあり、中学校の学区を園の地域として捉えている。

保育実践の特徴

) 認定こども園A園の実践例

A園では園児たちに「カップを見た」とか「怪しい足跡があった」などの「カップ伝説」が継承されてきた。地域の歴史研究者である若旦那が、カップ伝説に興味を持ち現代民話の紙芝居を作成する。毎年園長が年長児に読み聞かせをしているが、そのことをきっかけに園のピオトープにつながる川の清掃をしたり、町の歴史に興味を持ったりするようになった。地域の人

を保育に取り込むことで、地域と繋がり、地域を知るといった活動へと広がっていった。

この実践にもあるようにA園は地域の人（同じ価値観を持つ人）を園の保育に取り込み、地域コミュニティを再生しながら子どもたちの経験を豊かにする実践を行っている。

）Bこども園の実践例

園児はほとんど毎日散歩に出かける。散歩中には、さまざまな出来事や地域住民との出会いがある。散歩中に話しかけたお爺ちゃんが、紫蘇を分けてくれたことをきっかけに、毎年紫蘇ジュースを作っている。今は園のために紫蘇を育てており、それがお爺ちゃんの生きがいになっている。散歩中にはいい出会いばかりではなく、嫌な思いをすることもある。園では散歩を通して自分の身を守る方法を知り、地域社会を知る力を身につけると考えている。

B園では日々散歩に出かけていき、その時々に出会う地域での出来事を深める実践を行っている。日々の散歩や行事などにおいては、地域住民を巻き込みながら実践が行われており、それによって園を核とした地域コミュニティが形成されていると捉えることができる。

）Cこども園の実践例

沖縄県地域には、特有の豊かな自然や地域環境がある。保育者の多くは幼少期よりコミュニティにおいて地域を体感してきており、保育の中にも積極的に取り入れている。沖縄で育った園児たちは、エイサー特有の裏うちのリズムを自然にとることができ、練習しなくてもなんとなく踊ってしまう。行事などにエイサーを取り入れる際は、踊りだけでなく、モノなど意識的に環境を準備し、地域文化に触れる機会を増やす保育を実践している。

園児、特に保育者には、これまでの生活の中で地域特有の感覚が身につけており、そのことは普段の生活ではあまり意識されていない。保育者は子どもたちと地域特有の文化や環境への接点を多く設けることを意識し、保育を実践している。

地域への親しみを育む保育実践

フィールドワーク調査をおこなった3園では、どの園も子どもたちの地域への親しみを育む実践が行われており、子どもたちの経験が豊かなものとなっていた。そして) ~) の実践例からわかるように、それぞれの園が独自の実践の構造をもっていることが推察された。これらの実践は、他園においても地域性を考慮しながら応用が可能であると考えられる。フィールドワーク調査の結果は日本保育学会第76回大会、日本保育者養成教育学会第7回研究大会およびこども環境学会第19回研究大会で発表を行った。また、日本保育学会第76回大会で保育の実践者を招き自主シンポジウムを開催した。

(3) まとめおよび課題

全国質問紙調査の結果からは、ほとんどの保育現場で地域を意識した保育は行われているが、地域への親しみを育む実践にまでは至っていないことが推察された。また、保育現場では自己評価をおこなっているものの、地域に関連する多くの評価項目は、園運営や子育て支援に関するものであることが明らかになった。以上のことから、園児が活動の実体験として地域に親しむための具体的な保育実践を可能とする評価モデルを作成することの重要性が示唆されたといえる。

続いて、フィールドワーク調査では、異なる3地域のこども園の地域の捉え方や具体的実践について明らかにした。どの園の実践も園がある地域のもつ地域性に根差すと同時に、地域の人々を含めた地域環境を十分に活用していた。子どもたちの体験を豊かにすることによって、地域への親しみを育むことにつながる実践であった。全国各地に同じようなショッピングモールが立ち並び、地域コミュニティや地域行事が衰退している現在、A園やBこども園を卒園した子どもたちにとって、園生活そのものがまさに「地域」であると言い換えることができる。

フィールドワーク調査によって、地域への親しみを育む具体的な実践が明らかになったが、こうした実践を支えているものは保育者の意識であった。園長や理事長の地域とつながり地域住民や地域環境を保育に取り入れていこうという思い、そしてそれを具現化していこうとする保育者の意識が鍵を握っていると考えられた。しかし、実際に地域への親しみを育むための保育を具現化していくことは保育者にとって容易なことではない。続く保育者に実践を継承していくためにも、具体的な保育実践を可能とする評価を検討していく必要があるだろう。

本研究の目的は、「地域への親しみを育む」保育実践を可能とする評価モデルを作成することであった。フィールドワークより得られた子どもたちの地域への親しみを育む具体的な保育実践から、その実践の背後にある共通性に着目し、評価モデルを作成する予定であった。実際に実践に触れてみると、それは地域性や園の独自性に溢れており、どれも魅力的な取り組みであった。本研究期間で得た調査結果からは各園の園独自の実践の構造について明らかにすることはできたが、実践における共通性を見出すことはできず、評価モデルの作成には至らなかった。実践の分析の枠組みを変更すると同時により明確にし、実践を捉えていくと同時に、さらにデータを重ねていくことが必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 及川留美, 岩崎淳子, 金ミンジ, 粕谷亘正, 春日保人	4. 巻 9
2. 論文標題 保育現場において「地域」をどのように捉えるかー幼保連携型認定こども園教育・保育要領における記述と質問紙調査から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 未来の保育と教育	6. 最初と最後の頁 1 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩崎淳子 金ミンジ 及川留美 粕谷亘正 春日保人
2. 発表標題 地域への親しみを育む保育実践（1）認定こども園における「地域」とのかかわり
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金ミンジ 岩崎淳子 及川留美 粕谷亘正 春日保人
2. 発表標題 地域への親しみを育む保育実践（2）認定こども園における自己負評価の実態
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩崎淳子 金ミンジ 及川留美 粕谷亘正 春日保人
2. 発表標題 地域への親しみを育む保育実践（3）
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 及川留美 粕谷亘正 春日保人 岩崎淳子 金ミン志
2. 発表標題 地域への親しみを育む保育実践 4
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 及川留美 金ミン志 山並道枝 仲村幸浩 粕谷亘正 岩崎淳子 春日保人
2. 発表標題 地域への親しみを育む保育実践ーこども園における現状と課題について
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	粕谷 亘正 (Kasuya Nobumasa) (00559784)	和光大学・現代人間学部・准教授 (32688)	
研究分担者	春日 保人 (Kasuga Yasuto) (00736663)	聖徳大学短期大学部・保育科・准教授 (42502)	
研究分担者	岩崎 淳子 (Iwasaki Jyunko) (10620205)	大東文化大学・文学部・准教授 (32636)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	金 ミンジ (Kim Minjee) (40461800)	聖徳大学短期大学部・保育科・准教授 (42502)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関